

蘇東坡文学における卑俗の高雅化

合山, 究
九州大学教養部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/9809>

出版情報 : 中国文学論集. 4, pp.105-117, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

蘇東坡文学における卑俗の高雅化

合山 究

北宋の文人蘇軾（号東坡）が、詩文詞書画の各領域において画期的な業績を残し、文学史や芸術史の上に確固たる位置を占めていることは周知のことであるが、彼の功績はそのようなオーソドックスな方面だけに止まるものではない。今日から見て、彼の著作は、当時の文化の実態、生活の様相を最も生き生きと伝える貴重な資料となっており、彼自身はまた文化史的にみて、

なお幾多のあまり知られざる分野においても高い評価を与えられているのである。藪内清編「宋元時代の科学技術史」によれば、彼が自ら醸した数多くの新酒とその醸造法を書き記した文章は、中国酒造史のうえに重要な意味をもっているといわれ、また彼の医業本草への知識が相当に深いことは、それに関する多くの文章が残っていることからわれわれにも容易に窺われるが、それらは後人により同時代の沈括の薬方と一緒にされ、「蘇沈良方・同拾遺」としてまとめられ、漢方医術の上に重要な貢献をしていると同書はいふ。その他、彼が海南島で自ら製造

した墨について記した文章は、当時の製墨法の一斑を今日に伝えるものとして文化史的に貴重であるといわれ、またお茶における彼の風流な飲み方は、喫茶の歴史に大いに影響を与えており、さらに彼の作った珍しい食べ物とその調理法を書いた数多くの詩文は、中華料理の歴史の上に彼の名前を忘れることのできないものになっている。

以上述べたこと以外にも、蘇軾の文化史的貢献は多々あるであらうが、とにかく彼は当時の生活万般について、あくなき興味を抱き、珍しいものがあればすぐに心を動かし手を染めて、自ら創造したり工夫したり試食したりせずにはおかないよい意味の好奇趁新な性質を持つていたようであり、またそれを文学作品として賦詠することにも何ら躊躇しない放膽さを持つていたのである。このように彼は生活派詩人（文人）的な側面を多分に持っていたのであるが、さらにそれを傍証する資料として、彼の撰といわれる「格物叢談」・「物類相感志」の二書がある。

これらはともに、当時の日常生活に必要なこまごまとした知識を、樹木、種植、果品、飲饌、身体、服飾、菓餌、器用、文具……など数十の綱目に分類して集録したもので、頗る実用向きの生活百科全書ともいべき書物である。ところで、この二書は、後人の偽託である疑いが濃いため、これをもって決定的な證據にすることはできないかもしれないけれども、とにかくこのような仮託が行われること自体、彼がある面で生活文学者として、自然界のあらゆる事象に対して格別旺盛な興味を示し、鋭い観察眼と博物学的な幅広い知識とを持っていたことを示すには足りるであろう。

そのようなわけで、彼の詩集には、文人風の高雅超脱な作品ばかりではなく、日常卑近な生活情況に取材した作品が、とりわけ顯著にみられ、時には卑俗きわまりないものや醜悪なものとさえ思われる種々雑多な生活内容を豊富に詠みこんだものすらもある。その一端を具体的に窺うために、詩材の一部をのぞいても、例えは、鳥糞・山胡・竹罇・水馬兒・鷄濫堆・蠍虎・促織・蛭娘・天水牛・鬼蝶などの小動物や昆虫類、鰻魚・鮠魚・漢陂魚・鰻魚などの魚類、櫻筍・石芝・紫团参・樺括・人參・地黄・枸杞・甘菊・薏苡・黄精鹿などの薬草、また卑近にしてめづらしい蔬菜や樹木、また贈答品として文人同士送りあった珍奇な趣味品や日用品、あるいは鈎で泥の中の魚をとる風習を詠った「画魚歌」、故郷眉山の蚕市を詠った「和子由蚕市」などのような当時の風俗習慣を詠ったもの、また松の木を植える方を述べたものや黄州・嶺海での日常卑近な生活の様子を生きて伝えるものなど、数えあげればきりがなほほどである。

彼はこのように常日頃の生活の中で、見たり聞いたり食べたり栽培したりしたさまざまな事柄を、あたりかまわず詩囊に入れ、古来殆ど詩詠の題目とならなかつた事物をもはばかりることなく詠つたし、また時にはそれが未知の珍らしいものであれば、如何なるものであるかを詩序をつけて詳しく説明したりしたのである。彼の作品が、先に述べたように、いろいろの分野で、今日文化史的にことさら貴重な資料を提供しているというのは、このように当時の風俗文化を余すところなく詩囊に入れ、社会の諸相を如実に写し出しているからである。更に二三の例を挙げるならば、例えば田植道具を詠った「秧馬歌」は、曾安止の「禾譜」が農器具について全く触れていないのを不満に思った彼が、詩によつてわざわざこれを補足したものであり、「石炭」の詩は、彭城（徐州）で採れた石炭を用いて、鋭利な武器を作つたことを詠つたものである。また水車を詠んだ「無錫道中賦水車」もある。これらはともに当時の農業や鉄製錬の技術をよく伝える資料として屢々引用されることとなつてゐる。とにかくこのように、彼は、従来の多くの詩人のように、詩の材料を日常生活と遊離した高所に求めるのではなく、当時の卑近な生活万般にわたつてあまねくこれを探つたのである。

日常卑近な生活の中に詩の題材を積極的に拡充してゆくこととするこのような新しい詩風の勃興に先鞭をつけたのは、しかしながら蘇軾ではなく、蘇軾にやや先立つ北宋中期の詩人梅堯臣である。梅堯臣は、それ以前には詩に入りにくかつた卑俗な事柄をも意欲的に詩にとり込み、従来の詩とは全く異質の、実生活に即した新しい詩風を提唱し、いわゆる宋詩の魁をなしたの

である。その詩風を窺知するために、その詩題を一瞥すれば、彼は蚊・蠅・虱・蜂・河豚・鱈・蝦・蚯蚓・蛙・犬・猫・鶏・兔などの動物、農具・蚕具の詩各十五首、さらには便所のうじ虫をからすが啄む詩⁽⁴⁾やお茶を飲んで腹がゴロゴロ鳴るといふ表現の詩など、従来の感覚では非常識とも思える題材を詩に詠じたが、梅堯臣のこのような前衛的試作は、歐陽修らの暖かい支持や庇護もあつて、次第に北宋の詩壇に定着していった。蘇軾は、梅堯臣によつて開かれたかゝる生活詩への風潮をまともに継承し、更にこれを幅広く発展盛行させたのである。彼がこのように梅堯臣の開いた新傾向に躊躇することなく飛び込んでゆけたのは、後述するように、生来的に自然を愛し、人間界のありとあらゆるものに旺盛な興味を持つていたからであると思われるが、彼は単なる共鳴者ではなく、このような文学の日常生活化の方向をいよいよ押し進める創造者でもあつたのである。王十朋の「集注分類東坡先生詩」において、彼の詩が実に七八類にも類別されていることからわかるように、彼は生活全般にわたる多種多様な題材を自在に駆使し、ついには「取材幅広くして命意新たなり」(宋詩鈔序)といわれるような宋詩の一特色を遺憾なく形成するに到つたのである。

二

以上述べた諸例だけからでも、蘇軾が日常卑近な生活の全てに対してあくなき興味を抱き、少しでもめづらしい事柄に出くわすと、それをすぐに詩に詠み込もうとしていたことがわかるが、さらに、彼が特に屢々詩文に詠い、日常生活においてこと

に興味を持つていたかに見える事柄について、述べなければならぬ。それは蘇軾の飲食に対する異常なまでの興味である。中国の文人は、実生活において、「君子遠庖厨也」(孟子、礼記など)という訓えがあるにもかかわらず、古来食べ物や料理には比較的興味を持つている方であるが、蘇軾以前の文人で、酒や茶以外の食べ物のことを、彼ほど多く詩文の題材にとりあげているものは殆どいないのではなからうか。とにかく蘇軾は、わが江戸時代の祇園南海が、「宋朝に至りて、あらゆる俗趣を工なりとし、東坡に至りて、また専ら飲食の事のみ言う。卑陋の中の尤も卑陋なること、悪むべく、吠うべし」(「詩学述原」巻下)とけなしているほど、屢々詩文に詠つてゐる。彼の飲食を詠じた作品を、南海のように、卑陋きわまりないものに感ずるか、あるいはまた南宋の批評家胡仔が、「東坡は飲食において、詩賦を作りて以てこれを写す。往々皆な其の妙に臻る。老饕賦 豆粥詩のごときは是れなり。」(苕溪漁隱叢話後集巻二八)と言うように、称讃に価するすぐれたものと感ずるかは、各人の立場や詩観によつて異なるであろうが、とにかく飲食を詠つた多量の詩文は、生活派文人蘇軾の日常卑近性を最もよく表徴するものであることにはまちがいあるまい。飲食のことが明らかに詩文のテーマになつてゐる作品は枚挙にいとまがないので、最少限の主要な作品のみを以下にあげると、

○酒(家醸酒の製法や風味を賦した作品)

薄々酒(合注本巻14) 蜜酒歌(21) 逡巡酒(22) 洞庭春色(34) 新
醲桂酒(38) 真一酒(39) 真一酒歌(43) 中山松醪賦、洞庭春

色賦、桂酒賦、東坡酒經、酒子賦、濁醪有妙理賦

○食べ物

食雉(合注本卷2)、食柑(22)、煎米粉作餅子(22)、豆粥(24)、寒具(32)、蜜漬荔枝(37)、豌豆・大麦粥(37)、食檳榔(39)、槐葉冷淘(39)、荔枝嘆(39)、食荔枝(40)、玉糝羹(41)、蔓菁蘆菔羹(44)、食燒芋(50)、食新麪湯餅(50)、煮菜(50)、單饅頭(50)、後杞菊賦、服胡麻賦、老饕賦、東坡羹頌、菜羹賦、油水賦、猪肉賦、食豆粥頌、江瑤柱伝、その他筍料理など。

以上は主として詩文を通して見た蘇軾と飲食との関係であるが、次には飲食食物を通して彼と詩文との関係を見ることにしよう。

蘇軾の飲食料理に関する特別な関心については、すでに青木正兒「蘇東坡と酒」、「蘇東坡と味覚」(酒中趣、全集第九卷)、幸田露伴「蘇子瞻米元章」(新潮文庫、太公望、主羲之、所収)、篠田統「宋元酒造史」(「宋元時代の科学技術史」)などに詳細な記述があるので、ここでは簡単にふれるだけに止めるが、食道楽に人生愉楽の一つを見出していた彼は、この方面でも多くの風流な発明創造を行ない、それが故事となつて後世にさまざまな逸話を遺したのである。例えば、彼の発明した食べ物のなかには、今日の中国料理にまで名前を止めているものもある。ぶた肉を柔らかくなるまで熟煮して作つた東坡肉がそれであり、彼の「猪肉頌」によつて有名になつたものである。それによると、「黄州の人は猪肉をこのみ、しかも価が泥土のごとくやすく、貴人は見向きもしないし、貧乏人は食べ方がわからない」といい、彼が考

案した料理法を簡単に記している。当時ぶた肉はあまり上等の食べ物ではなく、士大夫は殆ど食べなかつたものらしく、蘇軾も左遷地の黄州において始めてふんだんにこれを賞味したものである。また「東坡羹」とよばれる料理も当時大変話題になつたものである。これについては、彼の「東坡羹頌并引」、「菜羹賦」などにその作り方がかなり詳細に記されているが、要するに魚肉を用いず、菜羹と御飯とを一緒に煮た雑炊のようなものである。彼はこの料理が大変自慢であつたらしく、海南島で子供の蘇過が、山芋で玉糝羹というところろに似たところろの料理を作つたが、これが東坡羹によく似ていたので、「南海の金蘆膾を以て、軽々しく東坡の玉糝羹に比するなかれ」と詠い、また韶州知事の狄咸も、それと相似たものを作る方法を知つていたので、「誰か知らん南岳老、解よく東坡羹を作るとは」と詩に詠っている。この「東坡羹」は、今日の中国料理には伝わっていないが、北宋末の惠洪覺範の詩にうたわれ(石門詩鈔、東坡羹)、また林洪の「山家清供」にも、彼の「東坡豆腐」や「元脩菜」などとともにあげられており、当時は蘇軾を慕う人々によつて大いに喧伝されたようである。

酒においても、彼はまたいろいろと醸造法を工夫して新酒をあみだしており、これに自分で名前をつけ、詩文に賦して話題をまいている。例えば、桂酒は、彼が惠州に流されてきたとき、当地の隠者になつて作つたもので、「嶺南にては家々に酒を造る。近ごろ一桂酒の法を得、醸成するに王晋卿の家の碧香に減ぜず。亦た謫居の一喜事なり。」(峯錢濟明書)と喜び、これを「桂酒頌」、「新釀桂酒」などに詠っている。「真一酒」な

る酒も、やはり惠州において自醸したものであり、「真一酒」の詩および「真一酒歌」によって知られる。その外黄州に流された時には、西蜀の道士楊世昌にならって蜂蜜で酒を作り、これを「蜜酒歌」および「又一首、答一猶子与王郎見和」に詠い、定州においては松やにを黍や麦にまぜて酒を作り、宋代律賦の代表的な作品とされる「中山松醪賦」を賦している。さらに酒に關しては、彼独特の醸造法を記した「東坡酒經」や酒の中汲（半熟酒の上しるをくもこと）を詠った「酒子賦」を作るなど、数多くの家醸酒をこしらえては、これにいちいち命名し詩文に賦しているが、枚挙にいとまがないので割愛することにする。

とにかくこのように蘇軾の食（食物）への関心は相当なものであり、流謫地の黄州においては、「予、東坡に在りて、嘗に親ら鎗（たけのこ）を執り、魚羹を煮て以て客を設く」（東坡先生志林卷九）というように屢々自ら庖丁を執っているし、その外にも、密州においては、杞菊の花びらを食べた唐の陸龜蒙のまねをして、彼もそれを食べ、「後杞菊賦」を作り、またあるときには胡麻を伏苓にまぜて食べたのを題材として「胡麻賦」を作っている。なにしろ彼の好物は、河豚、江瑤柱（かたはら）、荔枝、焼豚、竹筍（たけのこ）から蠔（かき）、蟹（かに）あるいは松膏（しょうこう）にまで及んでいるといわれ、自ら食いしんぼうの自分をモデルにした「老饕賦」を作っているのだから、まさにその名に恥じぬといふべきであろう。このように彼が食生活に特別の関心を抱いたのは、後述するような思想や性癖によるばかりでなく、謫居の時期が長かったため、そこで種々雑多の事柄（食べ物への興味もその一つ）に関心を示すことによつて、無聊と寂寞をなぐさめるよすがとしたことも、その一因として挙げられる

かもしれない。

以上、蘇軾の日常卑近性を最も特徴的に示している飲食に關する詩文について、作品と食（食物）物の両面から眺めたのであるが、このような簡単な叙述によつても、本稿の最初に述べた、蘇軾が中国の酒や料理の歴史の上に極めて大きな足跡を残しているということの、事実であることがうなずけるであろう。まことに彼は当時の偉大な食通でもあったのであり、文人趣味の一端としての食道案がおこり、後世の中国文人が食（食物）物に対して並々ならぬ関心を示すようになるのも彼より始まるといつても過言ではないであろう。

三

以上、総括的に言つて、生活万般にわたる素材領域の大幅な拡充という面から、蘇軾文学の日常卑近性を見てきたのであるが、ここではそのような詩文が、如何なる詩論の下に、作品としてどのように形象化されているかについて考察してみよう。一例として、先にあげた飲食に關する詩文のうちから、「豆粥」の詩を挙げることにしよう。この詩は東坡詩集合註本によれば、彼が黄州流謫を終えて長江流域を旅していたころの作とされている。まず詩の詠い出しの部分に、豆粥に關する光武帝と石崇の二つのいかめしい故事を引いて、われわれのどきもを抜いている。

君不見馮沱流漸車折軸

君見すや、馮沱がわの流漸に（光武帝が）
車の軸を折りしとき

公孫倉皇奉豆粥

公孫（馮異）は倉皇と（帝に）豆粥を奉げ

湿薪破竈自燎衣

湿りし薪もて破れし竈に（帚は）自ら衣を燎り

飢寒頓解劉文叔

飢寒より頓ち劉文叔（光武）を解きはな

又不見金谷敲冰草木春

又見ずや、金谷に冰を敲く草木の春に

帳下烹煎皆美人

帳下に烹煎するは皆美人なり

萍蘆豆粥不伝法

萍蘆と豆粥とは、法を人に伝えず

咄嗟而辦李季倫

咄嗟に辦えるは、石季倫（巻）なり

以上の莊重な詠い出しは、微々たる豆粥を詠うには、余りにも仰々しすぎるきらいはあるが、清の高宗は、「起伏開闔、氣偉采奇、青蓮無以過」と称讃している。これに続いて、詩の前半と後半のつなぎの部分では、すぐ前の光武と石崇の故事をふまえながら、彼らのような境遇においては、豆粥の眞の味はわからない、と批判的に詠う。

干戈未解身如寄

干戈は未だ解まずして、（光武の）身は寄するがごとく

聲色相纏心已醉

声色は相纏うて、（石崇の）心は已に酔えり

身心顛倒不自知

身心は顛倒して自ら知らず

更識人間有真味

更に人間に真味あるを識らんや

彼によれば、豆粥の眞の味のわかるのは、平凡なる日常生活の場においてであるが、ここに至つてはじめて、実際に豆粥をたいて日常平生活の様子が多量あらわれてくるのである。しかし日常平凡ななげない生活状況を詠うにしても、「東家」「鶏鳴」「蓬頭」などの由緒ある典故を用いて、学問的な雰囲気醸し出そうとしている。

豈如江頭千頃雪色蘆

豈に如かん、江頭に千頃と雪色の蘆のおいしげり

茅簷出沒晨煙孤

茅簷の家の出沒し、晨の煙のたらのぼるところに

地確春杭光似玉

地確に杭をつけば、光は玉に似

沙餅煮豆軟如酥

沙餅に豆を煮れば、軟らかきこと酥のごとし

我老此身無著處

我れ老いて、この身の著処なければ

賣書來問東家住

書を売りに、來り問とて東家に住まん

臥聽鷄鳴粥熟時

臥して鷄鳴き粥熟する時を聴れば

蓬頭曳履君家去

蓬頭に履を曳き君家にゆかん

以上みてきたように、豆粥という何の変哲もない卑近な素材をあつかいながら、実際に形象化された作品は、極めて学問的なものとなっており、豆粥の俗臭は殆どあらわれない。これをみても題材が生活に密着した卑近なものであるからといって、表現が必ずしも口語的庶民的なものであるとはいえないことがわかる。むしろ日常卑近な生活に立脚した素材を選べば選ぶほど、表現面、叙述面においては、俗的な生活臭を除去しようとするのである。彼はまたこの詩と同じような題材の「東坡羹頌」という短かい文章を作っているが、それにおいても「甘苦は常に極處より回る。鹹酸は未だ必ずしも是れ塩梅ならず。師に問う、此箇天真の味は、根上（六根、耳目鼻舌身意）より来るか、塵上（六塵、色声香味触法）より来るか。」と極めて学問的に賦している。このように彼の作風は（これはまた当時の詩人に共通していることでもあるが）卑俗平凡なものを題材とすればするほど、深い学問的な蘊蓄をふまえて、典故技法を活用したり、仏老の風趣を添えたり、或いはまたある種の哲理や人生観を説いたりして、題材そのものもつ日常卑近性を昇華し、作品を鄙俚淺近に墮さし

常卑近な事柄を詩にとりこむことにおいては、当時の誰よりも熱心であった。「竹坡老人詩話」に彼の言葉伝えて次のようにいつている。

李端叔嘗つて余の爲に言う、「東坡言う、「街談市語、皆詩に入るべし。但だ人の鎔化を要するのみ。」と。」

また彼は「宋史本伝」にも、「嬉笑怒罵の詞と雖も、皆書して之を誦すべし」といわれているところをみると、このような言葉は彼自身が屢々表明したばかりでなく、実作においても時々それを試みていたことがわかる。その例として、よく挙げられるのは次の詩である。

劉監倉の家に、米粉を煎て餅子を作る。余云う、甚の酥なるや（為甚酥）と。潘邠老の家に逸巡酒を造る。余これを飲みて云う。醋錯（醋錯）を水に著せしを作す莫きや否や（莫作醋錯著水來否）と。後ち数日、家を携えて郊外に飲む。因りて小詩を作り、劉公に戯れて、之を求む。

野飲花間百物無 花間に野飲して百物なく

杖頭惟挂一葫蘆 杖頭にただ一葫蘆を挂くるのみ

已傾潘子錯著水 已に傾く潘子の錯著水

更覓君家為甚酥 更に覓む君家の為甚酥

四

以上みてきたように、表面面敘述面では高踏性術学性を帯びるとはいえ、蘇軾はなぜかくも日常卑近な生活の中に積極的詩文の題材を拡充しようとしたのであろうか。ここではその要因について、彼個人に関する問題を若干考えてみたい。

まず最初に挙げられるのは、彼自身の人生観ないしは処生態度についてである。つまり彼の自然に対する根強い信頼とあらゆるものに美を見出すという思想とが、このような日常卑近な生活詠を促進させる上に有力な作用をおよぼしたのではないかと考えられることである。

蘇軾にあつて自然は、人間の眞の快樂の源泉であり、尽きることのない宝庫であつたが、彼の自然観の特色は、自然を非情なものとして見るのではなく、また冷酷な善悪の審判者として見るのでもなく、自然は人間に對して、無限の善意をふりそそぐ親しむべき対象として認識したことにある。彼のこのような自然観は、自然の無尽の善意を信ずる道家的な自然観と、短くはかない生物の存在を慈しむ仏教的な自然観とに支えられていたともいえるが、とにかく彼には大自然の中のあらゆるものが自己と共通の土壤の上に、ひとしなみに生をもうけて、互にかかわりをもちつつ相依り相援けて存在しているという万物共存の意識があり、そこから彼は自然界のすみずみにまで、あたたかい興味と觀察の目を注いだのである。彼の作品における大幅な素材の拡大は、彼の才学に負うのみならず、このような自然界のあらゆるものに對するともどもに生をうけているものとしての、あたたかい共感の意識によつて生まれものであると思ふ。彼が四十才、密州知事のときに作つた「超然台記」には、どんなつまらないものでも、見方や考え方によつては、それぞれに見るべく樂しむべき立派な価値を有すると次のようにいつている。

凡そ物は皆観るべきところあり。苟くも観るべきところあ

らば、皆樂しむべきところあり。必ずしも怪奇瓌麗なる者に非ざるなり。糟を餉らひ瀉を啜るも、皆以て酔うべし。果蔬菜木、皆以て飽くべし。此の類を推すや、吾れ安くにか住くとして樂しまざる。

このような思想の原形は、すでに莊子齊物論篇（西施と厲病人とを同一視した箇所）、知北遊篇（道は蟻、穉神、瓦甕、屢翁にも在らざるなしの箇所）に見え、また禪問答において、尊嚴なる仏も麻三斤、柏樹子、乾屎橛などにすぎないと説く思想も、これと多少の関連があるから、完全には彼の独創とはいえないけれども、それらの先行思想を自家菜籠中のものとして、彼がつねに抱持していた人生観ないしは自然觀照の態度であつたといえよう。同様の思想は、「答畢仲學書」においてもみえている。これは彼が黃州に流された時に書いたものである。その一部を引用すると、

菜羹菽黍も、差や飢えて食えば、その味は八珍と等し。而るに既飽の餘には、芻豢の前に満つるも、惟だその持ち去らざらんことを恐るるなり。美悪は我に在り。何ぞ物に与からん。

菜羹菽黍の粗食も飢えて食えばしごくおいしく、八珍芻豢の美味も満腹の後では見たくもない。このように物の美悪は、すべて人間の勝手きままな主観的分別によつて決まるのであり、物自体にはもともとなんの關係もないのだという。これと同類の考え方は、やはり莊子齊物論や嵇康「声無哀樂論」などに見えてはいるが、とにかくこのような立場で物をみれば、いかにつまらないものでも、何らかの価値を十分に見出すことが

できるし、またあらゆるものを詩の題材として取り入れることに何のほばかりもなくなるであろう。思うに、このような彼の自然界のどんなつまらないものにも美を発見しようとする思想が、卑俗きわまりもないものさえも、詩という高雅な器の中に盛るのに何ら躊躇させなかつたのであり、だからこそ彼が海南島で食べた山芋のころろを「天上の酥酪は則ち知るべからず。人間には決してこの味なきなり」と絶賛し、手づくりの蔬菜を「梁肉も及ばぬ」とはばかりることなく詩に詠い、蠶を食べては「中朝の士大夫をして知らしむるなかれ。恐らくは争つて南徒を謀りて以て此の味を分たん。」と得意げに書くことができたのである。

以上述べたような彼独自の物の見方ともいささか関連をもつことであるが、彼がありふれた平凡な日常生活、つまり腹一杯食べたり、熟睡したり、酔っぱらつたりするような単純な人生現象の中に人生最大の愉樂があり、そこに思想的な最高概念である「道」という最も深遠なるものが宿つているという思想をもつていたことも、彼を日常卑近な生活の万般に積極的の目を向けさせる作用を及ぼしたかもしれない。このような例は、枚挙にいとまがないが、

○ 酔時の真境、天蔵を發す。

○ 酔飽高眠は真に事業なり。

○ 一飽便ち終日、高眠百須を忘る。

○ 夢みる時は、我まさに寂たり。偃然として思う所なし。

（同卷40「和陶形神」）

○ 東坡居士、酒醉飯飽して、几上に倚る。白雲左に縋ひ、清

（合注本卷35「山光寺送客回」）
（同卷39「二月十九日携白酒」）
（同卷41「和陶劉柴桑」）

江右に廻る。：是の時に当りて、思う有るがごとくして思う所なく、以て万物の備えを受く。(東坡題跋卷六「書臨泉亭」)

「酒醉」「飽食」「睡夢」という、いわば人生の退屈な時間、思想的な最高境地を結びつけ、そこに悲哀のない最も充実した状態を見出そうとする思想は、莊子流の人生把握の仕方であり、これも必ずしも彼の独創的見方ではないかもしれないが、何にせよ平凡な日常生活の中に積極的に美を見出し、それを大切にしようとする彼の心的態度を示すものであることにはまちがいあるまい。

さて、彼の文字が日常卑近性に富んだことに対して、次に考えられる要因は、彼自身の性格的な方面にあると思われる。いずこにおいてもその時と所とにふさわしい適応性を發揮し、それぞれの境遇にに応じて、存分に楽しみを尽そうという思想を持つていた彼は、「甌北詩話」に「東坡は襟懷浩落にして他腸なし。凡そ一言の合、一技の長あれば、すなわち手を握つて歎をいう。傾蓋、故(旧知)のごとし。」といわれるように、性格的にも誰とでも気軽につきあう庶民性を備えていた。彼は廂堂にあつては堂々たる大官であつたけれども、黃州や嶺海の左遷地においては、下々のものともわけへだてなくつきあひ、庶民の生活の中にとけこんでともどもにそれを楽しんでゐる。例えば海南島において作つた、「酒を被むつて独行し、徧ねく子雲、威、徹、先覺の四黎の舍に至る」詩は、詩の題材に美惡を扱ばぬことの新奇さとともに、彼の庶民のなかにとけこんだ人柄と生活ぶりを窺わせるに足るものである。

半ば醒め半ば酔いて諸黎を問う

竹の刺と藤の梢とに歩歩ごとに迷う

但だ牛の矢を尋ねて帰路を覓む

家は牛の欄の西また西に在り

さらにまた、彼の性格的な面について補足すれば、彼が新奇なものの未知のものに喜びを見出す、好事家的氣質を持つていたことも、日常卑近なものへ心を傾けさせた要因に数えることができるであろう。彼の物好きは、日常生活の中で、ちよつとも興味あることに出くわすと、あたりかまわず手を染め、それを詩文に詠わずにはおれなかつたのである。例えば「石芝」の詩は、仙人の食べ物を求めるといふ彼のめずらしがり屋的性質によつて作られたものの一つであるが、その序に次のように言つてゐる。

元豐三年五月十一日癸酉、夜夢に何人かの家に遊ぶ。堂の西門を開けば、小園古井あり。井上は皆蒼石なり、石の上に紫藤を生じ、龍蛇のごとく、枝葉は赤箭のごとし。主人言う、此れ石芝なりと。余率爾に折つて一枝を食う。衆、皆な驚き笑う。其の味は鷄蘇のごとくして甘し。明日、此の詩を作る。

このような好事家的性格によつて作られた作品は、「椶筍」「元修菜」「食檳榔」「食荔枝」のごとく、彼の詩集には実に数多く、それらはおおむね日常卑近なるものに取材してゐるといつてもいいのである。

以上、彼の文学が日常卑近なるものを指向した要因を、彼の思想と性格の両面から簡単にさぐつてみた。

五

さて、宋の詩がそれ以前の詩に比べて格段に「日常性」に富み、「生活に密着」したものであることは、吉川博士が宋詩の特色として屢々指摘される所であるが、その要因として、氏は、一つは詩自体の自律的展開によるもの、つまり「抒情を主とした従来の詩が、しばしばおちいった空虚な抽象、それに對する反省、ないしは反撥が、内発的なものとしてあること」、もう一つは詩人を取りまく社会背景、生活環境の変化、つまり「宋の人々の生活環境が、それまでの中国のそれとは、画期をえがいて、現代のわれわれに近づいてきたこと」、の二つを挙げてゐる（宋詩概説）。前者、つまり、詩自体の自律的展開については暫くおき、私はここで蘇軾が日常卑近なるものを大胆に詩文の素材にとりあげ、生活文学をはなやかに流行させた外的要因として、後者、つまり、当時の社会の動向について、いささか言及してみたい。

宋代は諸種の産業がほうはいとして起り、商業經濟が著しく發達し、新しい文化が沛然と勃興した時代であることは、すでに歴史的に証明されているが、このような宋代におけるめざましい文化の發達は、人々の生活基盤を従来とは比べものにならないくらい多様化させた。例えば、宮崎市定氏が、「人類の文化は火力の利用に始まり、火力の高度が文化の程度に正比例するともい得る。宋代の製陶が空前の完成の域に達したのは、その胎土を焼きしめ、硬質の釉薬を溶解せしめ得る高度の火熱が基盤となつてゐた。当時、石炭の利用が漸く盛んとなり、薪炭

に乏しい国都開封府の日常炊爨には石炭が不可欠の燃料となつていたので、石炭を利用する高熱度がまず製陶に利用された。」（「東洋の近世」といい、石炭は「宋頃になると、一般の人民の間にも使われ、官營の石炭販売場も出来ている。」）（「中国における奢侈の変遷―羨不足論―」というが、そのような社会的背景があつて、はじめて彼の文人趣味が生まれ、「石炭」の長詩が生まれたのである。さらにまた、蘇軾が料理飲食のことを、ことに屢々詠うのも、それなりの社会背景なしには考えられない。宮崎氏はさらに、「思うままに火力を支配するということが、此の時代に行れたので、更に火力を通じて、あらゆる物に對する人間の支配が確立し、一般文明がずつと進歩した。中華料理がうまくなつたのも恐らく此の頃からであらうと思ひます。奴隸に羹を抱かせないでも、立派に飲める酒が醸されるようになった此の時代は、近世中国文明と共に、中華料理の黎明期でもあります。」（同上）といつてゐるが、ちょうどこのような時期に當つていたからこそ、蘇軾が飲食の詩文を数多く作り、中華料理の歴史に少なからぬ貢獻をなしたのである。

以上のように産業文化がめざましく勃興した宋代の社会において、支配階級である士大夫は、旧來の貴族のように、人民の生活から遊離して安閑と過すことは到底考えられず、人生のあらわな現実を率直に受け入れ、実生活にかかわりをもつさまざまな知識を幅広く身につけることが強く要求されたのである。小川環樹氏が、「唐代では本草書に記述された対象が、宋代では独立し、植物のいろいろな変種を記載した梅譜・菊譜・竹譜などが著わされ、また歐陽修の『洛陽牡丹記』は、園芸の發達

と関連したものである。」というが、このように北宋時代の文人は、おのずと自然科学的、博物学的な方面へも広く目を向けざるを得なくなつたのである。これ以外にも高僧伝の作者贊寧が「荀譜」を著わし、書家として有名な蔡襄が「荔枝譜」や「茶録」を著わし、詩人秦觀が「蠶書」を、文人沈括が「夢溪筆談」を、蘇頌が「新儀象法要」を、というように、さまざまな分野において、彼らは当時の文化を荷うべき万般の新知識を所有せざるを得なかつたのである。

このように新しい文化が澎湃として勃興し、支配階級としての士大夫が、それにふさわしい新知識を獲得するために、卑近な生活の万般にまで、あまねく觀察の目を注がねばならなくなつた時、その文学が必然的に生活文学の方向をたどるのは当然のなりゆきであろう。しかも新文化のめざましい発展により、士大夫の生活基盤が以前とは比べものにならない程複雑に拡散しつゝあつた当時の社会においては、陳腐な題材をことあらためて選ばなくとも、一たび自らの現実に目を向ければ、そこには生活文学の新鮮な素材が無尽蔵にころがっていたのである。のみならず、新しい生活文学には、彼らの生活と密着したある種の功用もあつた。その一つは、彼らが自らの審美観、価値観、觀察眼などにより、日常卑近な生活の中から、何らかのめづらしいものを選びぬき、それを詩文に詠めば、たちまちそれは一般に伝播し、大いに新文化創造の一翼を荷うことができたといふことであり（事実、文人趣味は、このようにして発生したものとと思われる）、また彼らが任意地をわたりあるき、そこで見たたり聞いたり食べたりしたためずらしい品物や風俗を詩文に賦せば、たちまちそれは

名産案内、風物紹介の意味をもつて一般に知れわたるので、地域の文化の発掘と普及とに大いに貢献できたことである。例えば、梅堯臣の「河豚」の詩が、あのように有名になつたのは、詩自体への共鳴もさることながら、当時江淮地方の人しか食べなかつた河豚を始め全国的美味として紹介したこと、つまり河豚の名産案内のものめづらしさが、人々の興味をひいたのであり、生活文学のおもしろさは、当時にあつては、むしろそのような所にあつたのではなからうか。もう一つは、日常生活の中で一寸しためづらしい出来事や生活体験をうたい、自らの生活状況を披瀝しあうことは、詩が多く書簡の役割を果していた当時においては、士大夫間の交遊にとつて欠かすことのできないことであつたという事実である。蘇軾詩の生まれた背景を調べてみると、相当部分の詩篇が手紙のはたらきをしていることがわかるが、これをもつても社交詩としての宋詩が、日常卑近な生活状況を反映するのは、当然のなりゆきであつたといえよう。

その他、生活詩が宋代に興つた社会的要因については、いろいろ考えられるであろうが、紙数も尽きたので、又の機会にゆずりたい。

註

(1) 長尾雨山「中國書畫話」三三四頁

(2) 四庫全書總目提要卷一百三十、子部四十、雜家類七「格物叢談」の項に「与世所伝賦物類相感志、大略相似、後有元范梈識、断為後人假託」といふ。

- (3) 以上、宛文生「梅堯臣」(中國詩人選集)解説参照。
- (4) 宛陵先生文集卷五十六「次韻和永叔嘗新茶雜言」詩。
- (5) 邵氏聞見後錄卷三十「東坡盛稱河豚之美」という。
- (6) 東坡統集卷十一「江瑤柱伝」
- (7) 竹坡詩話に「東坡喜食燒猪」「東坡喜嗜猪」という。
- (8) 清暑筆談に「東坡在海南、食蟻而美」という。
- (9) 東坡題跋卷一「書南史盧度伝」に「性嗜蜆蛤」という。
- (10) 東坡後集卷九「偃松屏贊」
- (11) 彼が如何に飲食料理を風流生活の中にとりこもうとしていたかは、「東坡云、爛蒸同州羔、灌以杏酪、食之以匕、不以筯、南都探心麵、作槐芽温淘……吳興庖人所斫松江鱸膾、繼以廬山康王谷水、烹曾抗鬪茶、少焉、解衣仰臥、使人誦東坡赤壁前後賦、亦足以一笑也」(茗溪漁隱叢話後集二八)の記事によつてわかる。また蘇軾以後の文人には、飲食料理を詠った作品が多いが、文人料理の専門書としては、陳達東「蔬食譜」、林洪「山家清供」、李笠翁「間情偶寄」袁枚「隨園食單」などがある。
- (12) 蘇東坡詩集合注本卷四十一「詩序」
- (13) 同卷四十「摘菜」詩序
- (14) 「清暑筆談」に引く「蘇過に与える書」